

4年後の教祖年祭に向け 心づくりと理づくりに励む一年に



立教百八十五年の新春
明けましておめでとうございます

大教会長 井筒梅夫

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

謹賀新年

立教百八十五年 元旦

芦津大教会

昨年は、真明組講名拝戴140周年の年として、「感謝と報恩」を胸に時旬の御用に励んだ一年でありました。殊に10月の記念大祭と記念おちば帰りに向けては、勇んだご丹精を頂き、大変ありがとうございました。2年ぶりにおちばへ帰られた教会長さんが幾人もおられました。その喜びはひとしおであったと思います。

さて、教祖百四十年祭を4年後に控えて、来年は年祭活動が始まります。つまり、今年は三年千日の活動に臨むための心づくり、理づくりの年になります。

コロナ禍は出口が見えておらず、その感染状況によっては、制限や自粛を求められることもあるでしょう。でも、コロナの収束をただ眺めるのではなく、コロナ禍でもできることはあります。昨秋のように、状況が落ち着けばおちばへ帰ることができます。教会へ足を運んで、月次祭を勤めることや御用を担うこともできるでしょう。日常生活においても、ひのきしんやつくし・運びなどの陰の徳積み、身近な人へのいをいかけやおたすけなど、ようばくとして働く機会はあるのです。

お互いに、我が心と信仰にしっかりと向き合って、できることからさせていただいて、心づくりと理づくりに励む一年にさせていただきたいと存じます。そして、昨年より少しでも成人の歩を進めて、年祭活動を迎えさせていただきましよう。

立教185年の新春を迎えおめでとうございます

井筒ふみ子



昨年もコロナを意識して通る年でありました。

この世界は親神様の御守護を頂いて陽気ぐらしのできる、親の温かい懷住まいでありながら、コロナという未知のウイルスによって、世界中の人々がおびえながら暮らすという大きな事情をお見せいただいている時です。この節の中から陽気ぐらしに導こうとされる親の御心を悟らなければなりません。

昨年日本でパリンピックが開催されました。従来なら私はテレビでチラッと見るだけですが、自粛を強いられていた昨年はテレビで観戦しました。鋼の装具を脚につけて走り幅跳び、両腕を失くした選手が水泳のバタフライに挑み、失明した選手の柔道、車椅子で走り回りぶつかりあうラグビー、バスケットを食い入るように見ました。メダルを手にした彼ら彼女らが「私たちは無くしたものを数えない、残っているものを生かす」と晴れやかに語る生き言葉に感動して、私は教えられました。

私たちは、コロナだからあれもできないこれもできない、身上だから事情だから、子供が幼いから年寄りだからと、無いものを数えて立ち止まっていけないでしょうか？ 私たちようぼくには、人をたすけてこの世を陽気ぐらしに建て替える使命が、御用があります。どのよう

な状況の中でも、自分に残された選択肢の中から自分にできることを選んで工夫して、たすけ一条の道を歩み続けられることを教えられました。

また昨年、和紙で亀を作りました、5カ月間かかりました。かぐらぶとめの練習に使っていただくお道具の一つです。お手本とするものもなく記憶をたどって型紙を作り試作を重ね、甲羅、頭、胴、手足、尻尾、どれも難しいながら楽しんで、一人部屋にこもって作り続けていました。

そんなある日、何故来る日も来る日も亀と向き合っているのだろう、何か神様の思召があるのでは？ と思索して気づいたのは、若い頃亀が大好きになって置物の亀を集めたことです。何処に出かけても亀が目につきます、お土産にもたくさん頂きました。外国の亀もいます。

一方で、亀を背負って勤められるくにさづちのみことさまの守護は「つなぎ」だと思い巡らして、私たちの信仰の初代様梅治郎曾祖父は、生まれ子を次々と亡くし井筒家の絶えるところを「つなぎ」の守護を頂いて今日がある、眞明組の元一日でもある。「つなぎ」の守護を「つなぎ」という固い信念を持てと、おやさまは亀に心を向けさせ、練習用とはいえ大事な亀を作らせて、明日からの心の向きを教えてくださいと悟り、勇みしました。男性は骨つっぱり、理の筋を通し、女性性は皮つなぎ、人と人の心をつなぎ役目でございます。

眞明組の先人は皆、初代様と共に心をつなぎ、家業を忘れておたすけに勇み、ちばに真実を運ばれました。今私たちは大教会長に心をつなぎ一丸となって、世界の大節の中をたすけ一条に勇み、ちばに真実を尽くそうではございませんか。

皆様、どうぞ本年もよろしくご厚誼くださいませ。

立教百八十五年

新春に
誓うI swear in the
new year
to the next

コロナ禍だからこそ

笠戸分教会長
原田 晃雄

「コロナ禍」と呼ばれる世の中になって早2年。昨年を振り返ると、「コロナ禍だから仕方がない」と自分自身で決めたつけ、毎月おちばに帰らせていただいて、おちばの理やたすけの元を戴いてはいたものの、丹精やおたすけの場を制限していたように思います。

「講名拝戴140周年記念秋季大祭」が行われる頃には、コロナの感染が少し落ち着いてきていましたが、教会の代表として私一人が参拝させていただきました。

当日、ここ最近のコロナ禍の祭典とは打って違って、大勢の方々が参拝されている姿を目にしました。その時、自教会の信者さん方に対して記念の秋季大祭への参拝、記念おちば帰りへの声がけの「推し」が足りなかったと反省させていただきました。せっかくの成人の句、御守護の句を遅らせてしまったことを申し訳なく思います。

今年もまだまだコロナの感染拡大は、予断を許さない状況にあると思いますが、「コロナ禍だから仕方がない」ではなく、「コロナ禍だからこそ」を意識し、周囲に心を配り、句を外さないおたすけを心がけたいと思います。

そして、「コロナ禍だけど」できることを思案し、来年に迫った教祖百四十年祭三年千

日活動の準備の年として、自教会につながる信者さん方と共に成人の道を歩ませていただきたいと思っています。

魅力ある教会長に

始良分教会長
川畑 正博

たすけ一条の御用の上にとめ切ることを誓い、教会長に就任して早くも2年が経ちました。ところが、教会長になつて数カ月後に新型コロナウィルスが、世界各国で猛威を奮いました。緊急事態宣言が発出される中、地域柄、周囲からの厳しい目もあり、おちば、大教会に帰らせてもらうかと葛藤をし、いろいろな人間思案を思い浮かべて悩む日々が続きました。

そのとき思い浮かんだのが、就任奉告祭で大教会長様が引用された、
本部という理あつて他に教会の理 同じ息一つのもの。

この一つの心 治めにゃ天が働き出来ん

明治32年12月13日

というおさしづでした。

こんなときだからこそ、おちばに、大教会にと心を繋ぎ、しっかりと親の理、たすけの理を戴かねばと思い、どんな中でも帰らせていただこうと心が定まり、そのお蔭で数々の御守護を頂きました。

これまで当たり前におちば帰りをさせていただいていたことが、当たり前ではなく、改めておちば帰りの有り難さを感じさせていただきました。

昨年、眞明組講名拝戴140周年の時句を迎え、信仰初代の元一日を振り返りました。そして親々の徳のおかげで代々変わらず結構に信仰できているということを思い返し、感謝すると同時に、自分自身の信仰を見つめ直すいい機会をお与えいただいた一年でした。今年、教祖百四十年祭の三年千日祭活動に入る準備といえる一年です。まずは、自身の教会でできることを考

え、教会が陽気ぐらしの道場に相應しい教会にならせていただき、思召に沿った魅力ある教会長にならせていただきたい。そしてようばく、信者の皆さんがおたすけに実動できよう成人していただきたいと思ひます。

何事にも「はこ」

末實分教会長夫人
水田理津子

一昨年、親神様の不思議な御守護と、上級会長様の並々ならぬ親心を頂き、神殿ふしん、主人の会長就任奉告祭を勤めさせていただきました。昨年は委員長長の御命を頂き、一生懸命つとめさせていただきました。こうと思っています。昨年は婦人会で「教会につ

昨年から家族に、さまざまな事情、身上を見せていただきました。そんな中、今まで自分に足りなかったものを再確認して、私にできることと

このコロナ禍で、特に教会への足が遠のいておられる方々へのおたすけの道中、不足に思うことも多少なりともありますが、良縁も悪縁も教会に繋がりのある方とのご縁は大事に、と聞かせていただきます。

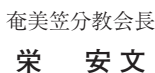
いつかは養育里親をさせて

さらには昨年、長女に婿養子を迎えさせていただくことが叶いました。それも全くの未信仰家庭から……。

今も本当に信じられ

ですが、こうして不思議なご縁を繋がせていただけたのも親々のお徳によりますことはもちろんですが、長女自身が心を治め、素直に通っている証と、教会家族はもちろん、信者の皆様にも喜んでもらっていることが本当に有り難いです。

初心に戻り一より始める



本年還暦を迎える年となり
感慨深いものがあります。

教会長のお許しを戴いてより15年目になりました。過疎化が進み、所属のようばく、信者さんの高齢化と、教会を支えてくださった方々の出直しがあり、教会内容の充実には程遠い状況であるのが現実です。

去年は眞明組講名拝戴140周

その中、教会の元一日を振り返ると、初代の入信のきっかけは、脊髄カリエスの身上で寝たきりのところを御守護いただき、道一条に勤められました。私は腰痛の持病があります、そのいんねんをしつかり自覚して、まずは人づくり、人材育成に努めたいと思います。

本年は教祖百四十年祭に向けて動きだす年ですので、活動が制限された状況ですが、徐々に元に戻ることを願い、できることから勤めて、少しでも親神様、教祖にお喜びいただけるような一年にしたいと思います。

還暦とは「出生時に還る」という意味があるそうですが、私も初心に戻り、一より始めたいと思います。

《11月月次祭 挨拶》

自分のできることから
勇んでかかろう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃は時旬の御用の上にご丹精くださいまして、ご苦勞様でございます。先月は「眞明組講名拝戴140周年記念秋季大祭」を約400名の方々にご参拝をいただきまして、心有り難く勤めることができました。記念おちば帰りも、ひとところに集まることはできませんでしたが、大勢ご参拝をくださいました。この大祭に向けて、真実の心でひとかたならぬご丹精を頂きまして、誠にありがとうございました。

さて、芦津大教会は五三郎二代会長様とたね三代会長様の時代に、道の伸展の素晴らしい御守護を頂きました。

道が伸び広がる証左の一つに教会数があります。梅治郎初代様の時代には眞明組の流れを汲む教会は相当できましたが、教会設立以降に限って数えますと、明治22年1月の設立から、出直された29年の年末まで、丸8年間の教会長在職期間中に、芦津を含めて32カ所の教会ができています。

ただ当時は地方庁の認可が下りなければ、教会としての活動ができない時代でした。芦津は大阪府から認可されるまで約2年半かかりましたから、実質5年半で32カ所が設立されたわけですので、大きな御守護であります。

そこから五三郎二代様の時代に新たに128カ所、たね三代様の時代に新たに217カ所の名称の理のお許しを戴いて、部内教会数は376カ所にまでなりました。これはあくまでも教会の数に限定をした比較ですが、初代様の頃の10倍以上になったのです。梅治郎初代様は大本の根としてのお働きをなされ、眞明芦津の道の確たる礎を築かれましたが、その根から大いに幹を伸ばされたのが五三郎、たねご夫妻でありました。

しかし、五三郎様の二代会長としての船出は荒波の中でした。五三郎様は明治29年に高安の松村家から井筒家へ養子に入りました。しかしご結婚の翌月、その年の大晦日に梅治郎初代様のお出直しという、芦津にとって大きな節が起こるのです。

併せてこの年は、国を挙げて天理教を弾圧するための「内務省秘密訓令」が発出された年でもあります。これによって各地の教会は大打撃を受けました。その影響もあって、当時の芦津は経済的に困窮の底にありました。西区・本田から7艘の船で運んできた井筒家の家財はいつしか失われ、教会建物は二番抵当にまで入っていたといえます。梅治郎初代様の夫人の^{まかな}とよ様とたね様が賃仕事を^{まかな}しては賄いに当て、着物を売っては布教費に当てるといった状況でした。

五三郎様は、19歳の時に淡路島に単独布教へ出て、洲本出張所（現在の洲本大教会）と部内教会を6カ所を設立し、井筒家に養子に入られました。ですから五三郎様が二代会長を継ぐことに何の異論もないはずでしたが、事はそう簡単に進みません。梅治郎初代様はお道の上に大きな足跡を遺されました。それを単独布教から7カ所の教会を設立した青年布教師といえども、初代様出直

しのひと月前に養子に入ったばかりの24歳の若輩者が、芦津の会長を継ぐことは、初代様を支えてきた周囲の人々の気持ちの上からはハードルが高かったのです。そこで一時は役員が会長代理を務めることになりました。

そうした最中に初代夫人であるとよ様が手首にお手入れをいただいて、余りの激痛におさしづを伺ったところ、

皆々若き者に凭れて……

明治30年3月23日

というお言葉が下がりしました。このご神意の下に芦津の総意は決して、五三郎様を二代会長に戴くことになったのです。はじめは会長のあまりの若さに二の足を踏む人々もありましたが、一に勢いの時旬の動きに一手一つに力を合わせるようになって、新しい力が湧き出てきたのです。

二代様には、就任以来揺るぐことのない信念がありました。それは、「道の歩みに沈滞は死滅を意味する。勇んで働く。このことが全てを活かすただ一つの道である。財政の困難を嘆く前に、不足不満を持つ前に、まず勇んだ心で人の為、世の為に働かせてもらうこと、難局打開の道はこれのみ」というものです。この固い信念をもって荒波の中を踏み出された二代会長に皆が心を寄せて、一手一つの勇んだ動きが生まれてきたのです。そして、芦津の道は素晴らしい伸展の御守護を頂いたのです。

二代様の道すがらを思案する時に、勇んで働くという精神に親神様がお働きくださったのだと考えずにはおれません。「人が勇めば神も勇む」と教えられます。では、どうすれば勇めるのでしょうか。周囲が勇める状況にあれば勇めるけれども、そうでない時には勇むことができないと考えてしまいがちです。もちろん、

そうした状況があることは事実ですが、勇み心は周囲や他の人から与えられるだけのものではなく、どんな状況の中でも、「勇ませてもらおう」「勇んで働こう」と、自分で自分の心を励ますことで、勇み心が生まれてくることを、二代様の信仰から改めて学ばせていただきました。

大きな心持つて何でもという。小さい心いずむ。

明治25年12月24日

と教えていただくように、心が小さくなったらいずむばかりです。難しい状況の中にあっても、大きな心になって勇んで働かれたのが二代会長様であります。

できることはいくらでもある

今は新型コロナの影響で、社会生活においてまだ制限される部分はあります。しかし、だからといって何もせずじっとしては、心が委縮して小さくなる一方で、勇めたものではありません。昨年の春はコロナの第2波が起こって、未知のウィルスの恐怖から全国一律に緊急事態宣言が出され、県をまたぐ移動の自粛まで求められました。私は当時、本部の布教部におりましたが、本部の布教部も活動がとまり、もちろん大教会もさまざまな活動を中止しました。こんなことが続いたらこの先一体どうなるのかと心配ばかりが先に立ちました。

そうした状況の中、「ひのきしんならでできる」と有志数名と連日本部でひのきしんをするようになり、日増しに人数も増えてきました。どんな時でもひのきしんならでできる。たとえ一人でもできる。お道の信仰は有り難いという気持ちが湧いてきて、心勇んだ



毎日を過ごしたことを思い出します。陽気ぐらしをするために、人をたすけるために、親神様から貸していただいている各々のこの身体を、思召に沿って使わせていただき、御恩報じの心で動き働くことで、心は自ずと勇んでくるように思えてなりません。

コロナ禍は厳しい節ですが、それ以上の厳しい困難な節の中を勇み心と一手一つの精神で乗り切られた先人の道すがらが手本として残っているのです。

勇んで掛かりてくれ。勇み無くては受け取る理は無い。

明治32年9月15日

勇んで掛ければ神が勇む。神が勇めば何処までも世界勇ます。

明治40年5月30日

とあります。

コロナ禍にあつてもやれること、再開できることはいくらでもあります。今日の大きな節が、楽しみの芽が吹く御守護を頂ける節になるように、教会長、ようぼくとして、心を大きく持つて勇んで働かせていただきたいと思います。

眞明組講名拝戴140周年の年も残すところあと1ヵ月。今年一年を心勇んでたすけ一条につとめ切りたいと思います。

今月の月次祭、誠にご苦勞様でございました。

(要約)

立教百八十四年 十一月 月次祭 祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、世界一れつをたすけたいとの思召のまに、温かき親心と尽きせぬ御守護を賜り、尚又私共をこの道にお引き寄せ頂き、たすけ一条の道をお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体ない限りでございます。私共はをやの思いにお応えさせて頂きたいと、日々に胸の掃除に努め、たすけ一条に心勇んで励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を合わせ、陽気に座りづとめてをどりを勤めて、十一月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と思い定めて参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、一層の成人を誓って共につとめに勇む状を嬉しくお受け取り下さいまして、親神様にもお勇み頂き、よろづたすけの理をお垂れ下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ教会長、ようぼく一同は、世界の上にもはたまた周囲や我が身にもお見せ頂く節々の中に親神様の深き親心を悟らせて頂き、感謝と報恩の心でたすけ一条に誠真実を尽くして、眞明組講名拝戴百四十周年の年を一手一つに勤め切らせて頂く所存でございます。何卒、親心溢るるお導きのまに、時句に相応しい成人の実を御守護下さいますようお連れ通りの程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《11月月次祭 神殿講話》

おかきさげを台に

信仰者らしい日々を送ろう

役員 井筒文夫

昨春秋と、本年春の2回にわたり、表統領先生から「これからの道の歩み」と題して、全教に向けてご提言を發表くださいました。

その内容は、今だからこそ、これまでの動きを見つめ直し、各教会が新たな目標を立て、コロナが収束したときに、着実に新たな動きが始まるように、今から準備をしよう。その中で、教祖百五十年祭、立教二百年を長期的な目標として据え、どの教会にもおたすけの実動があり、喜びのある姿を目指し、土地所に光輝く存在にならせていただく。その準備を行うのが、現在のコロナ禍のお互いのすべきことであり、大切なことは、14、5年後に自分に何ができるのかではなくて、14、5年後のお道のため、教会のために、今何がで

きるか、何をすれば将来のお役に立てるのか、ということでした。

本年は眞明組講名拝載140周年の節目の年です。初代をはじめ先人の方々の心を今に返して、その歩みに近づく努力を重ね、さらには通られた道を辿ることが本年を意義づけることになります。

今よりも、少しでも信仰者らしい心、態度、言葉、行いをできるように、そしておたすけ・丹精のできるお互いに成人しようということです。

かしもの・かりもの世界

そのために、どのような努力をすればよいでしょうか。先人たちは、おかきさげに示される思召を心として通られたからこそ御守護を頂かれたのだと思います。

そのおかきさげに、それ人間という身の内というは、神のかしもの・かりもの、心一つが我がの理。

とあります。神様がお創りくださったこの世界は、かしもの・かりものの世界です。身体は神様からのかりもので、心一つが我がものという世界です。

今は話を聞かなければならないということで、身体は束縛を受けおられますが、心の中は「今日のおかずは何にしよう」と思われている方もおられるかもしれません。自由自在に使えるのが心です。心の自由と反対に、自分では決して選ぶことも、変えることもできない世界も多くあります。

私の顔、私の身体、私の健康、私の家族、私の出会い、私の人生と言いつながら、何一つ選べず、変えることができない姿が数限りなくあります。それこそが神様からの与えだと教えていただきます。

おかきさげには続いて、心の理というは、日々という常という、日々常にこういう事情

どういう理、幾重事情どんな理、どんな理でも日々に皆受け取る。と仰せ下さいます。

日々に使うどんな心遣いも、心通りに皆受け取って、その心に相應しい姿を「選ぶことのできない与わりの姿」として与えてくださいます。良き心で良き行いをすれば良き理が添って現れ、悪しき心で悪しき行いをすれば悪しき理が添って現れる。

心の自由とは、「選ぶことのできない与えに對して、どう受け取るかが銘々の自由」という世界なのかも知れません。受け取り方、選び方一つで、次の与わる姿、質が変わってくると聞かせていただきます。心を変えれば人生が変わると教えていただくところです。これが、かしもの・かりものの世界です。

いんねんを見つめて

続いて、

受け取る中に、たゞ一つ自由という一つの理。自由という理は何処にあるとは思ふなよ。たゞ

めん／＼精神一つの理にある。とあります。

何とか願ひ通りにお働きいただきたい、という自由自在のお働きをくださる理は、心一つの理ではなく、精神一つと仰せられます。

日々 becoming 姿の元は心通ります。しかし、今この人にたすかっていたきたい、自由の御守護をいただきたいという元は、精神一つの理ということです。

私たちの心の中には感情があります。悲しいときには悲しい、喜ばうと思つても喜ばない、結構やと感じようと思つても感じられないことがあります。感情とは、自由に使える心の中にある、不自由な心と言えましょう。言い換えればこの感情こそが、お互いの癖性分といわれるものでしょう。

教祖は「癖性分をとりなされや」とお仕込みくださいます。癖性分を取るには、自分の心の中にある感情や癖性分を、乗り越える意思、信念を育てていくことです。

どれほど辛抱しても、悲しいことは悲しいし、辛いことは辛い。

腹の立つこともあれば、嫌なことは避けて通りたい。そうならならぬとおこうと思つても、なつてしまふのが性分です。

だけど、そう感じたときに、自分の意思で「腹が立つけど、親々ならこんなときどう通られたのだろう」「ひながたならどう悟らせてもらうのだろう」と、起こつてきた自分の感情をも含めて、感情を越えて、癖性分を超えて、次への決心と行動を決めていくことができます。これこそが本当の心の自由であり、お互いの信仰信念、精神一つの理だと思ふのです。感情、癖性分、心のいんねんを乗り越え、凌駕する。その精神一つの理に、自由の御守護を下さる、と仰せいただくのです。

このことは、それぞれの家々の元一日から思案すればよく分かります。

井筒家は、今年で信仰142年目ですが、子供が育たない、子供を見送らねばならないいんねんです。

初代、二代の間に、20人の子供ができましたが、17人もの子供を見

送っています。しかも、信仰しながらです。そして四代会長夫婦は一人も子供を与えていただけませんでした。

五代会長の代から、誰一人欠けることなくおいていただいている。母からすれば孫24人、ひ孫5人。誰一人欠けることなく元氣でおいにいただいている。井筒家のいんねんからいえば、こんな奇跡的な御守護の姿はありません。

結構な姿になつて約60年ですが、それまでの80年間は、信仰を続けながらも、最愛の子を見送り、与えていただけない。そんな中、たすけ一条の御用を、おちば、親の御用を担つてくださったおかげで、今の私たちの代の有り難い姿があります。

幾度となく我が子を見送らなければならぬとき、「信仰しているのに、なぜ」とか、いろいろな人間思案もあつたと思います。しかし、「まだいんねんが切れていない姿だ。これ乗り越えたらいんねんを変えていただける。これで結構だ、有り難いんだ」と、人間思

案を乗り越え、精神一つを定めて節を乗り越えてくださった。

皆さん方の初代や先人の方々も、結構だけで通られたのではなく、いろいろな節の中を、精神一つの理を定めて、御守護を信じてお通りくださったに違ひないと思ひます。

思ふようにならん、これだけ運ぶのならん、定めて居るのになあ、と思ふ。それでも精神定めてすれば、重々の理に受け取る。これ一つさしづして置こう。

明治25年7月4日
もうあかんかいなあ／＼というは、ふしという。精神定めて、しつかり踏ん張りてくれ。踏ん張りて働くは天の理である、と、これ論し置こう。

明治37年8月23日
心の精神の理によつて働かそう。精神一つの理によつて、一人万人に向かう。神は心に乗りて働く。心さえしつかりすれば、神が自由自在に心に乗りて働く程に。
明治31年10月2日
と仰せくださいます。

初代や先人の方々が、精神一つの心を定められた元を思案すれば、親神様の御守護を御守護と感じ、御存命の教祖のお働きを信じ切っておられたからに違いありません。かしまの・かりものの理合いを心に治め切られたからこそ、精神一つの心が定まったと思うのです。

報恩感謝を常に心において通られたのが、先人たちです。私たちもその後に続いて、報恩感謝を我が心として、人だすけの道を心がけたいものです。

人をたすける心へ

先ほどの一説に続いて、日々という常という、日々常に誠一つという。誠の心と言え、一寸には弱いように皆思うなれど、誠より堅き長きものは無い。誠一つが天の理。天の理なれば、直ぐと受け取る直ぐと返すが一つの理。よく聞き分け。

と仰せくださいます。

今年の4月から6月までの修養科に、余命2カ月の末期ガンの方々が志願してこられました。修養科

生や教養掛、詰所の勤務者も、みんなが、彼にたすかつてもらおうと、心を尽くしました。クラスメートも、おさづけを取り次ぎに詰所に通ってくれました。

周囲の温かい雰囲気の中で、「たすかりたい」という一心だった彼の心は、徐々に「人のために何かさせていたきたい」との心になっていきました。そして同期の体の不自由な修養科生におさづけを取り次ぎたいと、それこそ精神一つを定めて、おさづけの理拝載を目標に頑張つて通られました。

彼の病気は進行し、やがて歩行が困難になり、3カ月目にはほとんど修養科へ行けなくなっていました。しかし、別席だけはどうも辛い中でも、不思議と頑張ることができました。

拝戴直前には腹水がたまり、足もむくんで座れなくなっていました。しかし奇跡的に、おさづけ拝戴日の数日前から、尿が出だし、座れるようになって、無事おさづけの理を拝戴されました。初めての取り次ぎではみんなが涙を

流しました。その後、急激に体調が悪化して入院し、二度と詰所には帰ってこれませんでした。

修了日直前に病院に面会に行くという「ありがとう。もう充分や。おちばに帰ってこれて本当によかった。みんなと出会えて本当に良かった。本当にありがとう。温かいなあ」と言うのです。私は、心がたすかったと思いました。

そして修了式の朝、修養科の主任先生からお電話を頂きました。「本来なら修了はできません。でもこんな大変な中、修養科に来てくれて、修養科中にたすけの渦が起きました。特例中の特例ですが、修了証書を出させていただきます」と言っていました。

修了証書と記念写真を見て、彼は泣きながら喜んでいました。そしてその翌日、静かに笑みを湛えて出直していきました。

たすかりたい一心の心から、「あの人にたすかつてもらいたい、この人に喜んでもらいたい、人のために尽くしたい、もう充分や、有り難いなあ、温かいなあ」との心

に変わり、修了という最後の喜びまでお与えいただいたのです。

なぜそこまで心が変わったのか。それは、教養掛、修養科の仲間たちの多くの方々が、誠真実を尽くされたからこそだと思います。その心につけて不思議な御守護をたくさん頂戴しました。これこそおたすけです。

誠真実は、おたすけ、丹精に繋がります。特殊な能力や、技能は必要なく、しようとする意思、意欲次第で誰でもできるのです。

内々へのおたすけ

ある教会長さんからこんな話も聞かせていただきました。

両親と幼い子供3人の若い家族が事情教会を引き受けられました。何も大変な苦勞からの出発でしたので、10年、20年後を楽しみに「こどもおちばがえり」を柱として少年会活動に取り組みされました。最初は我が子3人だけでしたが、PTAの役員や町内会の役なども引き受けてコッコツと歩まれ、やがて毎年30人以上の団地で帰れ

るようになりました。

その会長さんが末期ガンで入院されました。そこで3人の子供が会長に代わって、20名ほどの子供を連れてこどもおちばがえりに帰ってきました。ところが、おちばに到着した途端、会長さんの出直しの連絡があったのです。

しかし子供たちは、このまま団参を続けようと決心し、連れてきた子供の前では笑顔を絶やさずに立派に務め上げたそうです。

葬儀の別れの言葉で「こんなに悲しくて辛いのに、これからも頑張ろうって思える。これも、お父さんに育ててもらったおかげだよ。

これから、皆で力を合わせていくから安心して見守っていてね」と、涙ながらに言ったそうです。

今ではその教会は、この3人が中心になって、人の出入りの多い、それこそ陽気ぐらしの手本とも言われる教会に成人して、理の栄えをお与えいただいております。

おそらく3人の子供たちは、父親の出直しを聞いて、感情としてはすぐに帰りたいかと思うのです。でも、「今帰ってもお父さんは喜ばない。最後まで務め上げる」とこそが、喜んでもらえるんだ」と、精神一つ定めて務め上げられました。辛い、悲しい葬儀の席上でも、頑張るからね、見守っていてねと、次へ向けての精神一つ定められた。なぜそんなことができたのでしょうか。

それは、お父さん、お母さんが日々常々、誠の心と態度で子供たちに接し、愛情込めて育てられたからに違いないと思うのです。

おかきさげはこう続きます。

又一つ、一名一人の心に誠一つの理があれば、内々十分睦まじ

いという一つの理が治まるといふ。それ世界成程という、成程の者成程の人というは、常に誠一つの理で自由という。よく聞き取れ。

内々とは家族、親戚です。職場で言えば、同じ部署の人々、パート仲間です。世間から見れば隣近所です。その内々が治まっていくなれば、たった一人でも誠の心、行いがあれば治まりに繋がるのです。その姿は、世間から見れば「なるほどなあ」という姿に映る。成程の姿の元は、誠の心と行いであり、それこそ自由自在の御守護に繋がるとお約束くださっているのです。

信仰者らしい日々を

私たちの生活の基本、信仰の基本も日々にあります。親々や先人たちは、日々を大切に通られました。教えに心を合わせ、信仰者らしい暮らしの中から、できることをコツコツと積み重ねられたのだと思います。

足元の小さいことに、真実の限りを尽くそうとする人は、多くは

ありません。それ故に値打ちがあり、この上ない人生の喜びの種として、親神様、教祖はお受け取りくださるに違いありません。大きな行事や活動ができない今だからこそ、一人ひとりが日々の信仰の在り様を正していかなければならないのではないのでしょうか。

現在のコロナ禍は、自分自身を見つめ、信仰者らしい日々へと変えていくチャンスです。「成程の人」を目指して、日々常々の中に成ってくる姿に精神一つの心を定め、まず身近な方から誠の心と行いで接し、真実を尽くし、運ぶ。

その成果として、子供や孫、友人など内々の方や身近な方が、14、5年後、月次祭でおつとめを勤め、参拝いただく方をお与えいただく。将来のために、そんな目標を持ちたいものです。

日々常々を大切にすることが、長期的な目標に向かう着実な一歩を記すことになり、先人たちの後に続くこととなり、講名拝載140周年の年を意義づけるものになると思います。



十一月月次祭 祭典役割															
祭主			扨者		座りつとめ		てをどり		地方		ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓			三味線 胡弓	
大教会長			川畑澄博		岩切正義		大教会長 湯川正岡 岩切正教 会長夫人 前会長夫人 井筒ちぐさ		奥田正徳 石川道夫 竹内義忠		瀧本眞二郎 山本義範 井筒敏成 奥田眞治 岡島秀男 山田道弘			岡島きよの 今川和子 奥田富美子	
指図方			賛者		賛者		瀧本基志枝 梶川りよ子 立花章子		守田清一 立花善三 浜田宣郎		木村真次 河端芳雄 梶川和隆 葎内善浩 立村俊和 中村文和			岩切孝子 川畑祝子 宗我邦代	
今川政治			岡本久昭		榎康紀		石川健郎 河合善洋 新居里実 岩切治代 中村寿々代 石川石美		奥田正儀 今川聖一 吉田裕樹		樋川泰士 梶川和人 西本興正 梶川芳男 瀧本亘 川畑正博			奥田千晶 西本美智恵 瀧本美奈	
湯川正岡 献饌長			伝供		在籍者一同										

すべてをひのきしんの手で

詰所勤務者棟改装工事

詰所勤務者棟は竣工より40年以上が過ぎ、屋根、天井、壁などにさまざまな不具合が出ていたため、昨年10月より内部のリニューアル工事を行っている。

今回の改装では、2階部分の廊下の位置を変更し、2間続きの部屋を個室に模様替える。また壁や天井に断熱材を施すほか、天井床板、トイレ、洗面所なども新しくするなど、かなり大掛かりなものとなっている。

井筒文夫・詰所主任は「15年後を見据え、今後、教会の芯となる若者が育つ場にしたい」と、改装についての思いを述べている。

施工は、西本興正・本氣分教会長、吉田道忠・今津原分教会長らを中心に、詰所勤務者、青年をはじめ、部内教会長、青年会、学生会の有志らによるひのきしんですべて行っている。

今年3月末には工事を終え、新しくなった勤務者棟には、教会長子弟を中心とした、おぢば近辺で学ぶ学生たちも入居し、学生寮としても活用される予定となっている。

井筒文夫・詰所主任は「15年後を見据え、今後、教会の芯となる若者が育つ場にしたい」と、改装についての思いを述べている。



2階天井のパテ埋め作業



2階廊下、壁の施工の様子

道の将来を担う若者がおぢばに

芦津 道の後継者の集いⅡ(第3次)開催

育成部

大教会育成部(山田道弘部長)は、昨年11月27日、28日の2日間にわたり、「道の後継者の集いⅡ」を詰所で開催した。参加者は19歳から45歳までの芦津に繋がる若者34名。

この集いは、教祖年祭後から次の年祭までの10年間で、3年ごとに計画されている芦津に繋がる若者の育成、丹精活動の一つであり、昨年は、9月・10月を含めて3次の開催予定だったが、コロナ禍の状況を鑑みて、

第1次、2次は中止。3次のみ開催となった。今回の集いは、各テーマごとに複数の講座があり、参加者は自ら希望した講座を受講した。



魚さばきと包丁研ぎ

からスキルを身につけよう』をテーマに「魚さばきと包丁研ぎ」「覚えておきたいキャンプテクニク」「簡単スビードメニュー」「セルフストレッチ&マッサー

初日の午前10時から始まったグループワーク①では、班付スタッフの進行のもと、さまざまなゲームを通して班員同士が交流を深めた。昼食後、選択講座①では『教理を深める』をテーマに「かしの・かりもの」「十全の守護」八つのほり」の3講座に分かれて受講。講師の話に真剣に耳を傾け、その後のねりあいでは活発な意見交換がなされた。

選択講座②では『楽しみながらスキルを身につけよう』をテーマに「魚さばきと包丁研ぎ」「覚えておきたいキャンプテクニク」「簡単スビードメニュー」「セルフストレッチ&マッサー



DIY入門講座

ジ「DIY入門講座」といった、教会や日常生活に役立つ5つの講座を設け、参加者は実際に体験しながらの受講となった。

夕づとめ後、大教会長よりお話。「これからのお道を担う皆さんの人生の転機や決断時には、判断の基準を教祖の御心に求めて、どう通れば教祖が喜んでくださるか」と心を向けて進んでもらいたい」と期待を述べられ、その後、記念撮影を行った。

2日目は、選択講座③「おつとめを学ぼう」をテーマに「地方」小鼓「女鳴物」おつとめ衣の着付けから選択。信仰の拠り所となるおつとめ

について、詳しく学ぶ機会となった。

その後、天理大学教授・臨床心理士で、本部直属分教会淀高知布教所長・金山元春先生の「心の向きを変えよう」と題した全体講話を拝聴した。先生は、「人間関係は相互作用。相手を変えようとするのではなく、自分自身が変わるスイッチを入れることで人間関係はより良くなる。また、物事の捉え方を「問題志向」から「解決志向」へ変えていくことが大切」と、臨床心理の観点から、人間関係における心の持ち方、心の向きの変え方などについて、ユーモアを交

えながらお話しくだされた。最後にグループワーク②では、ワークシートを基にふりかえりを行い、参加者は班内で2日間の受講の感想や学んだこと、今後活かしたいことなどを語り合った。

参加者からは、「どの講座も新しい発見があり、考え方のヒントをたくさんもらった」「全てでは自分の心次第で変えることができると改めて気付いた」「自身と向き合うことを忘れず、広い心でいられるよう努力していきたい」といった声が聞かれた。

参加者からは、「どの講座も新しい発見があり、考え方のヒントをたくさんもらった」「全てでは自分の心次第で変えることができると改めて気付いた」「自身と向き合うことを忘れず、広い心でいられるよう努力していきたい」といった声が聞かれた。



おつとめ衣の着付け



金山元春先生の講話

立教184年 婦人会芦津支部総会を開催

昨年11月24日、婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は、

大教会で立教184年婦人会芦津支部総会を開催した。2年ぶりとなる今回は、状況を鑑み、直属委員部長、支部委員を中心に人数を制限して行われた。午前10時、井筒支部長の手に合わせて親神様、教祖、祖霊様を礼拝。

続いて第一部のおつとめ。三交替で、てをどり、鳴物を



真剣に勤めた。

次に第二部の式典。婦人会本部御祝辞を支部長が代読し、続いて挨拶。本年は婦人会本部の活動方針に基づき、大教会の活動指針である「感謝と報恩」を支部の活動方針として取り組んできたことを述べ、「コロナ禍にあつて、できることを探りながら務めさせていただいた会活動でした」と総括した。

さらに真柱様のお言葉を辿りながら教会のおつとめの大切さについて話し、「おつとめをしつかり勤め、今何ができるか真剣に考えて、若い世代とも思いを一つにし、力を合せて次の塚へ向かって一歩踏み出していかなければならない」と述べた。

次に大教会長が挨拶に登壇し、三代会長井筒たね様が道の子弟育成に真心をかけて通られたことを振り返り「教会長、ようばく子弟の育成は疎



かにできない。生み育てを活動の指針の一つとして、一層力を入れて取り組んでいきたい」と話された。また、先人の信仰を手本にし、末代続く頼もしい道を明るく勇んで進むよう期待され、「みちのだいの徳分を十分に発揮して、たすけ一条に心勇んでご丹精くださることをお願いしたい」と話された。

続いて会員代表が「誓いの言葉」を述べ、全員で婦人会会歌を声高らかに斉唱した。集まった婦人会員は60名、参加者総数は105名であった。

グラウンドゴルフで親睦

学生会

昨年11月14日、芦津学生会は親里で学生参拝デーと親睦会を実施。高校生、大学生11名を含む29名が参加した。

午前11時、本部北礼拝場に集合。1カ月間無事に過ごせた御礼と、コロナ禍の治まりを願っておつとめを勤めた。教祖殿、祖霊殿に参拝後、回廊拭きひのきしんを行った。詰所での昼食後、白川グラウンドに移動し、グラウンドゴルフを行った。学生たちはチームに分かれ、「英語使用禁止ホール」「英語以外使用禁止



ホール」「ホールインワン合戦」など独自のルールで対戦し、大いに盛り上がった。

詰所に戻り、表彰式。優勝チームにはお菓子で作ったバッグが贈られた後、学生会総務を勤めた八木淳成さん（東大屋）に花束が贈呈された。

参加した学生からは、「久しぶりに屋外で楽しい時間が過ごせた」との感想が聞かれた。なお今年の活動は、1月16日の学生参拝デーからスタートする予定。



立教185年 直属教会巡教 (1月～6月 実施)

大教会長 〓 韮・東津・日方・津和・天保山・

豊野・甲邊・和鎮

井筒文夫 〓 稗島・門司・芦東

奥田正徳 〓 尼崎・紀周

湯川正圀 〓 始良・當別・明道

瀧本眞二郎 〓 直轄・島原・芦ノ郷

守田清一 〓 日高・芦華

岩切正教 〓 大島・兵庫眞洲

川畑澄博 〓 四ツ山・天津

奥田眞治 〓 神の島・芦明徳

竹内義忠 〓 吉野川・本氣

山本義範 〓 入江・勝明・本明勇

山田道弘 〓 沖繩・神滝本

加世田 洋 〓 島下・芦浪

岩切正義 〓 本津・大冠

瀧本庄司 〓 青木・芦明照

※真明彰化・眞伯は世話人が巡教

立教百八十五年部内教会巡教

世話人が当該教会と相談の上、年間を通して実施する。

1月23日 大教会春季大祭

世話人 島村廣義先生ご巡教

喜びあふれるお供演奏

芦津鼓笛バンド

昨年11月14日、芦津団芦津鼓笛バンドが本部南礼拝場前でお供え演奏を行った。

一昨年、新型コロナウイルスの感染拡大によりこともおちばがえりが中止となり、それに伴い鼓笛隊が練習の成果を発表する場所も無くなってしまった。

その秋、少年会本部より、「特別企画 鼓笛お供演奏」



が打ち出されたが、練習ができず参加を断念した。

子供たちが大阪と天理に住するため、月に一度日帰りで、天理地区と大阪地区に分けて行う計画を立てたが、思うように練習ができず、昨年4月頃からようやく出演に向けての練習を再開した。全員が集まることはできなかったが、久しぶりに会う友だちと楽器に触れて、子供たちの顔には笑顔が見えた。

そして迎えたこの日は秋晴れの好天に恵まれ、14時30分、南門跡からパレード演奏を行い南礼拝場前へ。



初めにジュニア隊をメインにしてデイズニーの「ミッキーマウスマーチ」を演奏。次に本隊が、NHK朝の連続ドラマの主題歌にもなった「フレア」を演奏し、少年会員14名、高校生以上のスタッフ12名の計26名は、演奏できる喜びと感謝の心で、元気いっぱいにお供演奏を披露した。

スタッフの井筒みなえさんは、「コロナ渦の中、思うように練習ができずに当日を迎え、どうなるのかと心配しましたが、たくさんの方の応援や指導があり、これまでで一番いい演奏ができました。

今回、子供たちが鼓笛に対して真剣に考え、向き合ってくれていることを感じ、嬉しく思いました。

大勢の方のご理解やご協力を頂いたからこそ、演奏もできる。コロナ禍を通して、たくさんの方に支えられたお陰であることを再認識させていただいた一日になりました」と話した。

事情はこび

立教184年11月26日お許し
門司分教会

任命

十代会長

望月慶太 34歳



北九州市立門司北高校卒。

平成18年おさづけの理拝戴。

同20年修養科第810期修了。

同22年青年登用。大教会青

年の後、中山御分家宅で3

年6カ月青年として勤めた。

就任奉告祭

立教185年1月30日

立教185年教会長年頭会議

1月26日 午後3時

於・芦津詰所

内容 大教会長お話

各部連絡

入江分教会

移転・恒例祭日変更

大阪府大阪市東住吉区今川

8丁目4-25 より

大阪府枚方市津田西町1丁

目24-33 に移転

鎮座祭 立教184年12月11日

奉告祭 同 12月12日

【恒例祭日変更】

春季大祭 1月6日

秋季大祭 10月6日

月次祭 毎月6日

津阪分教会

臨時祭典日変更（神殿建築）

鎮座祭 立教185年2月10日

奉告祭 同 2月11日

教務部報

修養科教養掛（9月～11月）

教養掛主任

岩切 正義

教養掛

榎 康紀・仁尾 智教

湯川 正信・吉田 道忠

中村美津代・加世田陽子

鍋野小百合

教人資格講習会第116回修了

大西 直喜（上郡）

小川 正弘（加津佐）

立教184年11月10日

修養科第963期修了

南方 郁香（西浜）

細嶋千代子（芦日真）

北村 健治（芦姫）

北村はぎ乃（芦姫）

立教184年11月27日

おさづけの理拝戴《10月》

川口 晃徹（芦南）

吉岡 優（紀内）

中野 昭子（山城谷）

草田 武子（明道）

田村 洋子（吉野川）

《拝戴日順 5名》

初席《10月》

《3名》紀周

《1名》大関門・美三・芦姫・

芦山都・周室・芦明德

《順序運びより 9名》

月例統計（自令和3年1月1日～至令和3年10月31日）

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ づ け 戴	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	11	4	2	
東 津 (23)	5	2	3	2
吉 野 (29)	2	4		
島 原 (16)	3	6		
日 方 (15)	4	6		
稗 島 (7)	3	2	2	2
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)				1
門 司 (6)				1
當 別 (6)	5	8	7	
大 沖 (3)				
尼 崎 (2)		2		
四 ツ 山 (5)			1	1
大 冠 (2)				1
島 下 (1)				
天 保 (3)	1			
青 木 (1)				
芦 浪 (1)		1		
甲 邊 (1)	1	1	1	
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	7	1		
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)	1			1
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)		1		
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	1	1		
眞 明 彰 化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	44	41	16	9

青年会長様御臨席
芦津分会総会

立教185年（令和4年）8月28日（日）

青年会員 500 名、全部属分会委員長の参加を目指して

世界へ躍動、日々成人